清流

題字：芳野充

令和5年2月28日
第74号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

百尺竿頭に一歩を進む

今年も気づけば二ヶ月が過ぎようとしています。今年立てた目標や抱負が少しずつうすれてくるころかもしれません。何をかくそう、以前のわたしがそうでした。この時期になるとすでに自分で立てた抱負も覚えていない、という状況でしたので、当然それにともなう行動も早々にお蔵入り。そしてクリスマスイルミネーションが灯るころに、抱負を思い出し自己嫌悪を味わうというお決まりのパターンでした。いまではそのようなことは減ってきましたが、あらためて自分に発破をかける意味もこめて、今年の抱負を紹介させていただきたいと思います。

さて表題の言葉は禅語ですが、今年のわたしの抱負です。「百尺」は約三十メートル、「竿頭」は竿の先。つまり、「長い竿の先から、さらにもう一歩進む」というのが「百尺竿頭に一歩を進む」です。ふつうに考えると、それ以上進むと落ちてしまいそうなので、さらに先に踏み出す勇気はなかなか持てないものです。しかしこの禅語は、「ものごとには、もうこれでよいということはない。現状に甘んじることなく、さらに工夫、努力をかさねて、まだ先へと進みなさい」という、他人や自分自身を鼓舞するための言葉です。

気づけば四十も半ばを超えました。そこに代表取締役という立場を加えると、第三者から注意をうけるということは減多にありません。誰からも注意をされないから大丈夫、と思っているわけではありません。むしろ第三者とのやりとりで時折り、「いまのはもしかするとわたしに思うところがあったのではないだろうか」と相手の不満が表にでないことに不安を感じることがあります。あるいは、仕事上でも勉強をする上でも「もう十分にがんばった」「これくらいでいいだろう」と早々に区切りをつけ、惰性をむさぼることがあります。しかし、心のどこかでは何となくモヤモヤしたり、これではいかん、と感じたりします。

今年はそんなわたしに喝を入れるべく、「もう十分にがんばった」のあとに「でももう少しやってみよう」を加え、「もうあと三十分勉強してみよう」「一歩踏み出してわたしから声をかけてみよう」「この辺で区切りをつけてやるべきことに取り組もう」を少しずつ積み上げていきます。

ただ、自分がどの位置に立っているのかハッキリと分かっているわけではありませんので、えらそうなことは言えませんが、例え「竿頭」に立っていなかったとしても、心のなかには「常に一歩前に進む」という信念をもって日々の生活を送りたいと思います。

加来　寛